

Title	「国富論」以後
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1925
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.19, No.12 (1925. 12) ,p.1850(140)- 1871(161)
JaLC DOI	10.14991/001.19251201-0140
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19251201-0140

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「國富論」以後

高橋 誠 一 郎

Adam Smith の「國富論」中に表明せられたる思想が急速に全歐に傳播し、確然支配的地位を占むるに至れるの事實は思想史上に於ける最大なる驚異の一たるを失はず。然も斯くの如きを以て偏に彼れの著書の影響のみに歸するは固より誇張に過ぐるものと云はざるを得ず。周圍の狀況は亦た是れに對して貢獻する所頗る大なりしなり。Smith 自身は其の「國富論」に於て、貿易の自由が完全に英國に復活せしめらる可きとを期待するは恰もオセアナ若しくはユートピアの建設を英國に於て見んとするに等しきものなりと看做せり。嘗だに公衆の僻見のみならず、更らに是れよりも遙に打ち勝ち難き強敵たる多數個人の私利は不拔の力を以て之れに抵抗するが故なり。(Wealth of Nations, Bk. IV. ch. ii.)。彼れは植民地制度の變史に關しても亦た極めて慎重なる態度を以て言説せり。彼れは單に獨占の漸進的弛廢を以て望まじきものと觀たるに過ぎざりき。然るに恰も「國富論」の出版と同じき年の二月を以て對岸の佛國に於てはギルドの特權を廢止せんとする Turgot の布告は凡ゆる特權階級の反對を受け、應がて Turgot は財務總監の職より逐はれ、斯くて又た流血の革命より

或ひは此の國を救ふを得可かりし最後の防塞は徹廢せられたり。而して英國も亦た同年三月重大なる擾亂の渦中に捲き込まれつゝありしなり。そは、一國民は其の植民地を看るに同盟諸州を以てするに満足し、母國の屬領を以てす可らずと做せる Turgot の箴言を閑却せるに由る所大なりしものなり。マーカンチリストは植民地を以て母國の利益を助長す可きものにして、決して之れを損傷す可きものに非ずと觀たり。即ち植民地の利益は母國の一般的福利と看做されたるものに從屬せしめられつゝありしなり。植民地拘束の制度は亞米利加植民地の叛亂を喚起せり。此の前年を以て Berk's Hill の戰行はれ、而して數ヶ月を出でずして七月四日の獨立宣言は彼れ等の不和をして救治し得ざるものたらしめたり。是に於て乎、拘束の政策は繁榮をも自由をも生ずることなきの觀ありしなり。即ち這般の政策を保持し來れる佛蘭西は既に踰躓として破産の淵に向つて進み、英國は自己の人民と悽慘たる戰を交へつゝありしを以てなり。

合理的自由主義の表明としての「國富論」は最も合宜なる時機に於て現れたるものなり。そは實に舊制度に對する三大叛起の將さに勃發せんとしつゝありし時なりしなり。第一は母國によりて課せられたる租税及び統制の制度に對する亞米利加植民地の叛起なり。之れが結果として英國が其の最も貴重なる屬領を喪失するに至れるの一事は當さに Smith の峻嚴なる批評の正當なることを立證せるものなり。洵に「舊經濟學の衰頹を論證し、其の没落を完成せるものは Smith の著よりも寧ろ米國獨立戰爭たりし」の觀あるなり。

第二は英國をして工業國たるに至らしめたる産業革命なり。經濟上の自由を主張せる「國富論」出

版の年たる一千七百七十六年は政治上の自由を聲明せる米國獨立宣言の年として記憶せらる可きものなると同時に、同じき時代は亦た James Watt の蒸汽機關を首めとして幾多の大發明を見たるに由りて等しく記憶せらる可きものなり。固より是れ等の大發明が工業界の生面を一變せしむるが爲めには數十年を要したり。而も約半世紀以内に英國の主要たる工業に於ては是れ等の大發明汎く利用せられて製造工業界の革命は完成せらるゝに至れり。Smith は恰も産業革命の開始せられたる時代に生存せり。彼れの觀たる生産及び交易の世界は猶ほ若くして且つ比較的狭少なるものなり。彼れの擧示せる唯一の蒸汽機關は Thomas Newcomen の其れなり。而して綿業は彼によつて唯だ僅かに一度偶發的に言説せられたるに過ぎざりき。Smith が廣義に於ける農業のみ惟り純收益 (Pro-duce net) を生ずるものと觀たるフイジオクラートの學説を排斥し、這般の概念を擴張して一切の工業も亦た收益を生じ得可きことを主張せるの故を以て人は往々彼れを以てフイジオクラートの農業主義に對して工業主義の經濟學説を創始せるものと稱するも、彼れは畢竟ずるに家内工業制度の理論家たるに過ぎざりき。而も彼れの表明せる自由競争の理論は應がて家内工業よりも工場工業に對して一層良く適用し得るの觀あるに至れるなり。

第三は「國富論」の出版後十三年にして勃發せる一千七百八十九年の佛蘭西革命なり。大革命は大體に於て市民階級の性質を有するものにして、八十九年の Declaration des Droits de l'Homme et du Citoyen の第十七條は明確に財産權の不可侵にして神聖なる權利なることを宣言せり。而して凡ゆる人間生活に對する尊敬の念が悉く失はれたる恐怖時代に於てすら私有權に對する尊敬の念は依然として失はるゝことなかりしなり。而して終には戰爭と獨裁政治とを誘致するの結果を見たり。雖も、佛國革命は本來陳套なる制規拘束に對する叛起なりき。第十八世紀の歐洲各國民中に在つて專制政治と、封建時代の殘骸を止めたる諸特權と過大なる獨占業の弊を憂へざるものは一として存在するとなかりしも、而も佛國に於けるが如く、是れ等の三者が痛歎す可き状態に陥れるものあることなく、而して又た當時に在つて佛國民の如く以上三者の不正害惡を痛切に感じつゝありしものは非ざりしなり。當時に在つて保護干渉の過大に失したる國々は固より多かりしも、而も未だ佛國の如く惡法苛政の行はれたるものありしを聞かず。豪奢放縱を以て王位を冒瀆せる放埒無殘の國王を戴ける同國政府の如く國家權力を有害に行使して之れを汚辱したるものは非ざりき。特權階級が其の特權を濫用して國家及び人民の利益を侵害したること佛國の如く甚しきは非ず。獨占業者が偏狹固陋なる見解を有し、獨占の弊害深甚なりしこと同國の如きものは在らざりき。斯くの如き状態の下に在つて既に腐蝕せる歴史的傳來の諸權利に代ふるに吾人が生れながらに享有せる天賦の人權を以てし、獨斷的專制政治に對して個人の自由を唱道し、階級的特權を排して、各個人の權利平等を鼓吹するを以て其の使命と做す新思想の發生し來れるは當さに必然の數と稱せざるを得ず。而して終に大革命の霹靂と紫電の眞唯中に於て自由平等は宣明せらるゝに至れるなり。

斯くの如き間に於て亞米利加植民地を鎮壓し得ざりし英國は是れに由りて更らに自由なる政策を採用す可き實際的警告を受けたり。保護關稅の無用なるは獨立戰爭の終末と同時に英米間の貿易が従前に比して却つて繁榮に赴けるの事實によりて立證せられたり。一千八百〇三年 Jean Baptiste

Say は其の *Traité d'Économie Politique*. に於て曰く、洵に英國の亞米利加植民地喪失は同國に取りて利得たりしものなりと。(ibid., p. 240.)

米國獨立戰爭に加ふるに更らに他の原因は英國を驅つて關稅の一般的低減に赴かしめたり。第一に英國工業は既に多分に優秀なる機械の供給を受け、其の商人は那翁戰爭の終末と共に痛切なる販路の必要を感じたり。而して是れに伴ひ農業保護の結果として高價なる穀物が勞働費用を増加すこと、做すの信念は次第に鞏固と爲りつゝあるなり。Adam Smith の友人 Shelburne 伯 (William Petty) は一千七百八十三年を以て Versailles 條約を締結せるが、Smith の影響は彼れが漁業及び毛皮業の如き諸通商問題に關して比較的開明なる處置に出でたるの事實に現れたり。一千七百八十四年を以て William Pitt は宰相と爲れり。熱心なる Adam Smith の學徒たる彼れは直ちに「國富論」の原理を實行するの事業に着手せり。米國獨立戰爭中に於て英國の公債は一億二千六萬磅より二億四千萬磅に膨脹し、三分利付公債は五十七磅に下落し、而して悲觀論者は幾度びか「亡國」を絶叫せり。此の難局に處して Pitt は其の眼前の問題が政治的なるよりも寧ろ經濟的なりと斷定し、偏見を去つて國家の繁榮を増進せんことを期せり。當初よりして彼れは凡ゆる貨物に於ける密輸入の激増が該物品に對する關稅の過重なるを立證すと做せる。Smith の主張の眞理なるを承認せり。斯くの如き事情の下に於ては關稅の低減は消費者を救濟すると同時に亦た歳入を増加す可きものなり。是に於て乎 Pitt は茶に對する關稅を十一割九分より一割二分五厘に低下したるが、其の結果として新關稅は一千七百九十三年には従前の七十萬磅に對する六十五萬磅と云ふが如き殆んど舊關稅に等しき收入を擧ぐるを得たり。而して彼れは其の翌八十五年を以て大不列顛及び愛蘭間の通商關係を改善せんことを擧に出でたり。而も此の計畫はホイッグ黨及び製造業者の反對によりて破られたり。其の翌八十六年を以て行はれたる英佛間に於ける通商を發達せしめんことを期せる彼れの畫策は更らに大なる成功を收むることを得たり。彼れは英國の人口に三倍せる約二千四百萬の住民を有する佛國を以て急速に膨脹しつつある英國工業品に對して有利なる市場たる可きものと認めたるなり。是れ等兩國間に通商條約を締結せんとするの意向は久しく Shelburne の抱懷せる所にして、彼れは熱心に Pitt の努力を援護せり。斯くて Eden 條約によりて初めて佛國との間に自由貿易を基礎とせる條約は締結せられたるなり。(F. W. Hirst, *From Adam Smith to Philip Snowden, a history of free trade in Great Britain, 1925, pp. 4-9.*)

洵に「國富論」は其の出版後十年を出でずして這般の好果を收むることを得たりしなり。Pitt は一千七百八十七年 Smith の倫敦に來るや、一再ならず之れと會見して財政上の諸問題を諮問せり傳へ言ふ、兩者が Wimbledon Green なる Dundas 家に於て會合せる際、Smith 遅れて至りしが、Pitt を初めとして同じく座に在りし Addington, Wilberforce 及び Grenville は孰れも皆な起立して彼れを迎へたり。Smith が彼れ等の長く起立を續くるを見て其の着席を求むるや、Pitt 答へて曰く「否、貴下の着席せらるゝまでは余等は着席せず、蓋し余等は悉く貴下の學生なればなり」と。Smith 亦た Pitt を讚美すること大にして、一夕彼れとの會食果て、後、Addington に向ひて曰く「非凡なるかな、Pitt、彼れは余自身よりも善く余の意思を理解す」と。(Pellow, *Life of Sidmouth, I, p. 151; Rae,*

op. cit.; p. 405.)。

初め Adam Smith の聴講者として後其の親友を爲れる Sir William Pultney (William Johnstone) は「國富論」の出版より二十年餘を隔てたる一千七百九十七年の演説中に於て「Adam Smith は現代を説服し、次代を支配するなる可し」と云へるの言を引用せり。(Rae, op. cit., p. 103.)。這般の言は果して如何なる資料より引用せられたるものなるか、今は之れを知るの道なきも、而も此の言が大體に於て事實と爲つて現れたるは疑問の餘地なき所なり。

Smith が人民の最大多数階級たる労働無産階級に對する其の同情の發露する所は往々にして雇主及び其の利益を擁護する法律に對して最も痛烈なる攻撃と爲りて現れたり。彼れが「國富論」第一編第十章第二部に於て主として労働者に及ぼす弊害より立論して、かの Elizabeth 女王朝の「徒弟條例」(Statute of Apprentices) を攻撃せるが如きは即ち是れなり。一千五百六十二年の徒弟條例は實に從來ギルドの間に行はれたる中世的工業規定に國家的法典の形式を興へて、之れを汎く全般の工業に適用せるものなり。彼れは労働階級に對して深甚なる同情を有しながら、其の自ら攻撃せる舊産業制度撤廢の後に生ず可き労働關係の變化を了知し得ざるものと見ざる可らず。彼れは將さに衰滅せんとしつつある小工業のみを念頭に置きて其の筆を運びたり。彼れは單に舊套なる産業組織を自ら好み、其の獨占權を濫用して貧困なる労働者と一般公衆とに損害を興へつゝある小工業の親方を注意せるに過ぎざりき。彼れは只管徒弟條例廢止の結果、獨立して工業を經營し得可き者の數、増

加す可きを望み、大工業の發生と共に巨額の資本を要するに至り、之れが爲めに徒弟條例に基ける制限よりも更らに大なる障害發生して企業の獨立經營を困難ならしむ可きを豫想するを得ざりしなり。而して彼れは單純なる同條例の廢止が獨立企業家の數を増加することなくして、却つて労働者の存在を危うからしめ、其の境涯をして更らに悲慘ならしむ可きを知らざりき。斯くて佛國に於ては一千七百七十六年ギルドの特權を廢する Hugot の布告發せらるゝや、雇主階級は之れに對して激烈なる反對を試み、労働者は跋扈擧げて之れを迎へたるに反し、英國に在つては一千八百十四年、三十萬人の労働者は連署して徒弟條例廢止反對の請願を爲し、雇主は却つて聲を大にして其の撤廢を呼號するに至れり。蓋し斯くの如き相違を生じたるは Hugot の布告發布の年にして亦た「國富論」出版の年たる一千七百七十六年より徒弟條例廢止の年たる一千八百十四年に至る短少なる年月の間に世界の局面が俄然一變せるに因るものなり。即ち一千八百十四年の交に至つては英國に於ける産業界の革命全く成り、大規模の工業は絶對的優勝の地位に立つに至れるが故なり。斯くて徒弟條例に對する雇主及び労働者の地位は全然顛倒し、同條例の存在は大工業家に取りて妨害と爲り、労働者に對しては援護と爲れるなり。即ち Smith の主張は工業の變遷に由りて最早其の所期の目的を達するに不十分なるものと爲れるなり。新たなる時代に對しては舊來の産業組織を社會より一掃し、労働の自由、労働者及び雇主の權利平等を唱道するのみを以て足れりとせず、積極的改革によつて此の自由と平等とを確保するの一事は最緊要事と爲れるなり。大工場主は強者の常として何等の拘束なき自由の境地を希望し、徒弟條例の全廢を見んことを要求せり。彼れ等の間に在つて

眞に Adam Smith の學說を信奉する者は蓋し少數なりしならんも、而も彼れ等は這般の問題に關して最も巧妙に彼れの所說を援用し、以て自家の主張を貫徹するの用に供したるなり。(Brentano, a. a. o.)。

三

全局より觀て Adam Smith の直接後繼者中に在つて最も影響大なりしものは Jeremy Bentham なり。彼れは微利貸付に對する古來の見解より完全に解放せられたる最初の經濟學者の一人なりき。彼れは管だに微利を否認せる傳統的主張と戰へるのみならず、利率の最高限度の法定なくんば、貨幣は慎重なる人々の手を離れて浪費者及び設計家に移る可しと做す Smith の意見に對しても亦た挑戰せるなり。(cf., Defence of Usury, shewing the Impolicy of the Present Legal Restraints on the Terms of Pecuniary Bargains; in Letters to a Friend, 1787.)。彼れは原則として政府の本分は無爲主義 (quietism) を奉じて自利をして其の完全なる發動を行はしむるに存するものと思惟す。「大多數の最大幸福」は又た彼れによりて其の A Fragment on Government, 1776. に於て立法者の嚮導原理にして主要目的たる可きものと宣言せられたり。(The Works, vol. I, 1818, p. 242.)。營利心と自由競争の無制限なる作用は極めて無造作に此の定則の名辭に移されたり。自由競争は縱し如何なる災害を個人の上に蒙らしむることありとするも、それは大多數の最大幸福に資す可きものなり。Adam Smith は單に經濟學の範圍内に於てのみ、國家の妨害を蒙ることなくして、自己の私的利益を追求するに委せられたる個人が心なくして、然も公益に資するの結果、即ち彼れ等の社會に取つて最大可能なる富と商業上の繁榮とを齎す可きとを立證し得るものと思惟せるなり。然るに Bentham は管だに經濟的事項のみならず、政治學及び一般生活に於ても、個人的利益以外に眞の利益なしと論じたるなり。經濟學は既に Malthus によつて或る程度まで功利主義と一致することゝ爲れるも、應がて James Mill 及び Ricardo を通じて Bentham 流の特殊の形態に於ける功利主義を同一視せらるゝに至れるなり。如何に當時の一般人士が是れ等兩者を密接に關聯せしめつゝありしかば、彼の Thomas Carlyle が Utilitaria と稱する怪物と dismal science (經濟學) とは全然同一なる致命的謬想の相異なる方面なりと稱しつゝあるに徴しても明かなるものあらん。(Signs of the Times, 1830.)。

四

Adam Smith の名聲は暫く Ricardo の其れによりて陰蔽せられたり。「國富論」は殆んど廢物として取扱はれたり。赫奕たる光輪は Ricardo を廻れり。(T. E. Cliffe Leslie, Political Economy and Sociology—Fortnightly Review, February I, 1879.)。彼れは世界主義の自由の理論を Smith に享けて、更らに之れを發達せしめたり。既述の如く自由競争の理論は家内工業よりも新たなる工場工業に對して更らに良く適用し得るの觀あるものなり。而も從來の分配理論は新たなる經濟社會に對して其の儘適用せらるゝこと能はざるものと爲れり。工業家は最早昔日の如き手工業者に非ずして、毫も筋肉勞働を行ふことなき雇主と化するに至れり。土地及び資本の對立は利潤と對比せる新たな地代の説明を促したり。同時に食料の價格騰貴は穀法問題を惹起せり。低廉なる勞働を得るが爲

めに低廉なる食料を欲しつゝある工業階級は地主に對して陣容を整へつゝあるなり。高價なる食料及び地代の原因並びに其の救済策は那邊に存するや。地代は當さに土地の生産物をして高價ならしむる原因に非ずして其の結果たるものなり。穀物は地代の支拂はるゝが故に高價なるに非ずして、穀物の高價なるが故に地代は支拂はるゝなり。而して地主が其の地代の全部を拋棄するとするも、穀物の價格には何等の減少をも惹起するとなかる可し。Ricardoは是くの如く説く。彼れは其の地代説に立脚して農業を以て特に保護を要するを爲すの提案を戦ふ。勞作階級の大多數は賃銀勞働者と化せり、而も英國の繁榮は資本の發達に依るの觀あり。勞銀は如何にして決定せらる可きものなるか。勞銀と利潤とは相互に對して如何なる變化を爲すや。利潤の割合は勞銀の下落と共に増加し、勞銀の上騰と共に減少す。加之ならず、資本は今や機械の形態に於て新たに重要なる意義を有するに至りたるが故に、資本の研究は亦た機械の經濟的效果の研究と爲れり。機械の使用は地主及び資本家に取つては有利なるも、是れが爲めに總收益の減少を伴へる場合には勞働者の一定數は失業の境涯に陥り、人口は之れに生計を興ふ可き基金と比較して過多と爲る可きが故に、彼れ等の階級に取つて有害と爲ること多かる可きものなり。而して租税は如何なる階級によりて負擔せらるゝや。彼れは主として抽象的見地よりして種々なる課税の究竟の轉嫁を探究せんことを。Ricardoは狹隘なる意義に於ての功利主義者なりき。彼れは又た明かに一個の唯物主義者なりき。彼れの經濟學に在つては支配權を有するものは自然の諸力にして、人は環境によつて支配せらる。社會的理想は其の中に在つて殆んど顧みらるゝことなし。彼れは個人主義者なりき。彼れの市民は「經濟人」なりき。

彼れの哲學は當時の英國に於ける第三階級の其れなりき。而して彼れは其の先輩の何人よりも經濟學を他の諸學、殊に倫理學及び法律學より分離せしむることを大なりしなり。

五

經濟學は恰も Ricardo 及び Mathus の兩者に於て二個の相異なる研究方法を取れる二個の相對立する思想系統に分岐せるの觀あり。Smith は現實の社會を論じ、正常なる一般人の行爲を考察せり。「利己心」の權化たる「經濟人」は一部論者の言ふが如く、決して Smith の創造に係るものに非ず。「國富論」の舞臺に登場する者は何れも皆現實の人物なり。「國富論」は後の經濟學上の著作に於けるが如く、假定的に單純化せられたる擬制的の人間を取扱はずして、活き且つ動く現實の具體的の人間を論じたるなり。此の書は希臘人及び羅馬人、中世諸國民、蘇國人及び英國人に就いて言説するものにして、決して抽象的の世界に逸出することなかりき。而も Smith が萬有の調和的仁惠なる自然的秩序に關する先驗的推定を前提させる演繹法を多く使用せることも亦た事實なり。固より斯くの如き潜在的假定は彼れの哲學に大なる瑕玼を興ふるものなるも、而も彼れの研究方法は全然是れに由つて決定せらるゝものに非ず。在るが儘に事物を観察せんとする彼れの傾向は其の後繼者の多數の陷れるが如き放漫より彼れを救ひたり。凡ゆる人は他人に關する事項よりも直接自己に關するものに遙かに深き利害を感ず。個人は偏に自己の私利を企圖す。而も彼れは斯くの如く行動するに當りて「目に見えぬ手に導かれて」毫も自己の企圖するとなき公共の福利を増進するに至る。(Wealth of Nations, Bk. IV, ch. 5.)。人為の制度は公共の利益を増進せんとして却つて其の目的を失す。

ること多し。而も總べての特惠若しくは制規の制度が完全に撤廢せられんか、明白單純なる自然的自由の制度は自から確立せらる。(Ibid., ch. ix.)。斯くの如き理論は Smith によつて其の經濟學說の基礎として明白に提示せらるることなきも、而も事實彼れの經濟學說の安んずる秘奥の根柢たるなり。而も彼れが私利と公益との間に矛盾の存することあるを明確に主張しつゝあるの事實は彼れに對して同情薄き獨逸經濟學者すら承認せざるを得ざりし所なり。(Karl Kries, Die Politische Oekonomie vom geschichtlichen Standpunkte, 1883, S. 224-225.)。斯くて又た自利心を以て經濟行爲の出發點と爲せる Smith は經濟行爲が正義の準則の支配下に置かる可きことを知悉せるなり。(Wealth of Nations, Bk. IV. ch. ix.)。

要するに彼れの大著中には二流の思想系統、即ち一は人間の便益を企圖する自然法を假設し、之れより出發して聰明なる自利心の上に確立せられたる經濟的組織の樂觀的見解に到達するものにして、他は歸納的過程を辿りて、現實に作用し來りたる事情若しくは施設の結果として人間社會が現存しつゝある諸般の状態を説明せんとしつゝあるもの、影響を看出さざるを得ず。後年の二大學派、即ち經濟學を以て理論的抽象的及び演繹的科學なりと做すものと、之れを以て倫理的、現實的、及び歸納的科學なりと做すものが孰れも彼れを引きて自派を擁護せんとし、或る者は經濟學をして初めて演繹的科學の權威を有するに至らしめたるものは彼れなりと做し、他は又た彼れを以て斯學に於ける歴史的方法の創始者として看做すが如き矛盾を生じたる所以のものは畢竟するに彼れが演繹歸納兩推理の極端に走るを免れ得たることを立證するものなり。彼れは苟も富の現象を研究するに資する以上は如何なる方法と雖も、之れを拒むことなかりしなり。彼れは時には彼れの理論を事實より構成し、時には其の理論を立證し證明するが爲めに事實を使用せり。「測定し得る動機の理論」の萌芽も、事實の大數觀察の上に徐々に建設せられたる系統的知識の例證も等しく「國富論」中に發見せらるゝを得るなり。而して吾人は Adam Smith 中に認められ得る歸納的傾向の後繼者を T. R. Malthus に於て(其の「人口論」改訂以後に取れる研究方法に於て)看出し、抽象的演繹的傾向の持續と發達とを D. Ricardo に求むるを得るなり。

後世に至つて盛んに論議せらるゝに至りたる根本的論争點の多くは既に彼れ等二人者の時代に發せるものなり。「Malthus 宛 Ricardo の書翰」は當時の時事問題に關するもの多きに拘らず、斯くの如き見地よりする時は、今日に於ても猶ほ多大なる興味を吾人に興ふるを得可し。(cf., Letters of David Ricardo to Thomas Robert Malthus, 1810-1823, ed. by James Bonar, 1887.)。而も尙ほ彼れ等二人者は其の學說上根本的相違を有するに拘らず、Adam Smith を以て其の共同の師として承認し、唯だ有爲なる門下の如く、其の師の所説を批評し改訂するを意とせざりしなり。今些か價值學說に就いて觀るに、Smith 以前に試みられたる價值の説明は殆んど其の説明を彼れに於て看出さるゝと稱せらるゝ所にして、彼れが其の説明中に相矛盾せる二個の見解を綜合せることは殆んど疑ひなき所なり。略言すれば、彼れは一は哲學的、他は經驗的なる二個の理論を表明せるなり。彼れは前者に於て價值の特性と思惟せらる可きものを明瞭ならしめんと試みたり。這般の企圖を遂行するが爲めに Smith は先づ一般經濟生活の複雑なる事情より抽象して、單純なる原始自然の状態に自己を

限定し、這般の状態に在つて價值を發生せしむるものは勞働なることを看出せるなり。(Wealth of Nations, bk. I, ch. v.)。彼れは斯くの如くして到達せる價值の觀念を價值現象の經驗的事例に適用す。彼れは又た現實生活に於て看出ざるゝがまゝに價值及び其の多少を決定する諸原因を敘述す。吾人は爰に彼れの經驗的理論に到達するなり。而して彼れは爰に哲學的に價值の唯一原因として承認せられたる勞働が實際的にも亦た其の唯一原因たるものに非ざることを明確に認めたるなり。(Ibid., ch. vi.)。 (Friedrich von Wieser, Der Natürliche Werth, 1889, S. xvii.)。 Ricardo は實に約半世紀の後に於て Smith の價值學說中に存する不完全なる點を明瞭ならしめんとせるものなり。彼れの全努力は Smith の哲學的理論と經驗的理論とが、一見せる所の如く、相互に矛盾せるものに非ざることを示さんとするに存す。而して勞働費用は市場價值を制規すること做す純粹なる古典的價值理論は専ら Ricardo に屬するものなり。 Mathus は其の價值學說に於て著しく Ricardo 及び其の亞流、即ち彼れの謂ゆる經濟學の新學派と相違するものなり。彼れは貨物の生産に投入せられたる勞働の定量を以て其の價值を制規すと做せる Ricardo の學說の正確ならざることを主張し、支配せらるゝ勞働の定量を以て價值の尺度と做すの意見を力説す。而も勞働支配説は固く Adam Smith の學說たりしものなり。洵に Smith の主たる事業は價值に關する英佛の先人及び時人の推定を結合し、發達せしむるに在りき。彼れは初めて價值が一方に於ては富を取らせんとする購買者の欲望を測定し、而して他方に於ては其の生産者の支拂ふ努力及び犠牲、即ち「眞の生産費」を量定するに由りて人間の動機の尺度たるの徑路に對して細心なる科學的研究を行へるなり。

嘗だに吾人は「國富論」中に於て經濟學の中樞理論の原始的形態を看出すのみならず、斯學の各部門に於て Smith が後世の經濟學的研究の結果に對して極めて密接なる關係を有するの事實を發見せしを得ず。洵に Smith は其の「國富論」を整然、生産、分配、交換、消費を取扱ふ別個の部門に分割することなく、此の書の配列は系統に於て缺くる所あるものあり。經濟學の傳統的區分法は D. Boileau の Introduction to the Study of Political Economy, 1811. Jean Baptiste Say の Traité d'Économie, Politique, 2me éd., 1814. 並びに James Mill の Element of Political Economy, 1821. 等に至つて確立せるものなるも、而も「國富論」の第一及び第二兩編は本質的に後の批判と思辨との更らに分なる發達を表示する生産、交換、及び分配の理論を包含するものと稱せらるゝを得可し。而して例へば富の分配に参加する種々なる階級の收得を支配するの法則の如きを取りて觀るに、吾人は Adam Smith が如何に克く後の經濟學者の陥れる誤謬の多くを免れ、眞理の要素を捕捉せるの觀あるかを認めしを得可し。(L. L. Price, Adam Smith and his relations to recent Economics, read before Section F of the British Association at Edinburgh, August 12, 1892.)。

六

Smith の學說の影響は懸がて又た大陸に於ても之れを認むるを得るに至れり。「國富論」は F. Dräbge によりて丁抹語に反譯せられ、七十九年より八十年に互りて出版せられたり。彼れは佛蘭西に於ては既に其の「道德的情操論」によつて認められしが、一千七百七十七年二月の Journal des Savans は初めて「國富論」に關する記事を掲げ、某々文豪の談として、此の有用珍奇なる著も收益不確

定なるが爲めに何人と雖も出版費を負擔するものなかる可しと稱したるが、本書は實に一千七百七十九年より一千八百〇二年に至る二十年間に Abbé Blavet 詩人 Roucher, Germain Garnier 伯等の手に成れる諸譯の出版を見たり。Blavet 譯は初め七十九年より八十年に懸けて毎月 Journal de l'Agriculture, des Commerce, des Finances, et des Art. に現れ、次いで八十一年を以て取纏めて出版せられたり。而して那翁一世の大藏大臣 Molien 伯は自ら Smith の學徒を以て任じたるものなりき。獨逸に於ては Friedrich 大王も、皇帝 Joseph も、又たフイジオクラートを好遇せる諸君主の孰れと雖も毫も「國富論」に注意を拂ふことなく、同國の新聞雜誌も之れを引用し論駁することなかりしが、惟り英國王室との關係より英國心酔の傾向ありし Hannover 王國のみは夙に此の書に對して注意を拂ひたり。即ち此の國に於ける「國富論」に對する最初の評論は一千七百七十七年三月十日及び四月五日の Göttingische gelehrte Anzeigen. に現れたり。Göttingen 大學の一教授は七十七年より七十八年に互れる冬の學期に於て之れに關する講義を行へり。而して同書が、一千七百七十六年より同八年に互りて Johann Friedrich Schiller によりて反譯せられたる當時は未だ顧る者少なかりしが、一千七百九十四年通俗哲學者 Christian Garve 及び Dörrien によりて反譯せられてより此の偉大なる蘇國學者の影響は次第に獨逸に於て顯著と爲るに至れり Christian Jacob Kraus は既に一千七百八十一年を以て Königsberg 大學に於て「國富論」の講義を開始せるが、彼れは一千七百九十六年 Voigt に書を寄せて、世界は會つて之れよりも重要な書に遭遇したることなく、又た新約全書以後の如何なる書と雖も此の書が更らに善く知悉せらるゝに至りたる時、其の生せしむ可き有利なる結果よりも有益なる影響を生せしめたるものなしと言へり。而して當時の有名なる政治家 Gertz は九十年十二月其の友人に書して三度此の書を通讀せる旨を物語れり。(Gertz, Briefe an Christian Garve, S. 63; Rae, op. cit., p. 360)。東普魯西に於ては煩瑣なる賦課、租税及び多數の封建的障害は國內商業より排除せられたり。而して Smith の原理は多大なる反對を排して全獨逸に普及せり。那翁戰爭の終局に至る迄に官憲並びに教職に在る經濟學者は新思想の洗禮を受けたり。Sein 及び Hardenberg は實に其の嚮導たりしものなり。而して一千八百二十一年の普國關税は慎重なる態度を以て Smith の學說を適用せる歐洲最初の關税たりしなり。

Graf Julius von Soden の主著 Die Nationalökonomie, 1805-24 九卷は Garve 譯「國富論」の評論より發したるものなり。彼れは Smith の原理が獨逸に於て知悉せらるゝに至りたる時、大體に於て之れを採用すると共に更らに系統的なる形態に於て之れを表現し、若しくは批評的修正を加へて更らに正確に斯學の根本概念を決定せんとせる者の一人なり。而して Karl Heinrich Rau, Karl Friedrich Nebenius, Friedrich Benedikt Wilhelm von Hermann 及び Johann Heinrich von Thünen 等は大體に於て Adam Smith の傳統を承けて進める者なり。尤も Thünen の如きも Smith は其の時代に對しては論じて遺憾なきを得たるも、其の後に至りて發生せる階級軋轢の不安に由りて經濟學者は更らに其の歩を進むるの要あるを認め、Hermann の如きも其の價值及び分配の學說に於ては著しく「國富論」の其れと相違せる所論を爲し、且つ私的利害によりて動さるゝ個人的活動を以て國民經濟の一切の所要に應ずると能はざる旨を聲明し、這個國民經濟の領域内に於ては謂ゆる共同的精神をも亦た等

しと認むるの餘地あるものなりと思惟し、(Staatwirtschaftliche Untersuchungen, 1832, S. 12-18.)、其の師 Kant の Kritik der reinen Vernunft. の觀察方法を以て進める Gottlieb Hufeland は Smith 及び其の學派に對抗して生産費が斷じて價格形成上唯一の決定的意義を有するものに非ざるを論じ (Neue Grundlegung der Staatswirtschaftskunst durch Prüfung und Berichtigung ihrer Hauptbegriffe, I. Teil, 1807, S. 132 ff.)、Johann Friedrich Eusebius Lotz も亦た彼れが使用價值より分立せる交換價值に注意を向くることの餘りに専らなるを難じたり。(Revision der Grundbegriffe der Nationalökonomie, in Beziehung auf Feuerung und Wohlfeltheit, angemessene Preise und ihre Bedingungen, Bd. I, 1811, S. 10.)。

七

而も同國は臆がて痛酷なる Smith の批評家を出すに至れり。浪漫主義の經濟學者 Adam Heinrich Müller は其の第一に位するものなり。彼れは Smith の學說並びに一般の近代的經濟學が機械的、原子論的、個人主義的にして又た純然たる唯物主義的性質を具有する社會觀を提唱し、一切の倫理的勢力を無効に歸せしめ、道德的指揮の必要を無視し、結局私有財産及び私益の理論に過ぎざるものにして、其の國民的共同一致及び歴史的連續不斷の關係に於て人民全體の生活を顧みざるを論據として之れを排斥せり。斯くて彼れは國民經濟の有機的單一と永續性を認めて、主として世界主義並びに個人主義に挑戦し、而して又た根本的に Smith を異れる方法を以て取扱はれたる價值論を認めんとせり。(Cf., Die Elemente der Staatskunst, 1809, 18. u. 19. Vorlesung)。

次いで Friedrich List は Adam Smith の研究が物質的價值を創造する人間の活動に限定せられたるを難じたり。List は國民的富強を以て其の論據を爲し、社會の眞の經濟的職能は實に財貨を生産するに止まらずして、財貨生産力の完全且つ多方面なる發達に存すと爲し、保護の手段に依りて國家は其の國民を訓練して産業上の効果を大ならしむ可きものなりと主張せり。彼れは Smith にして若し交換價值の觀念によりて支配せらるることなく、「生産力」の觀念を追求せり。こせば、經濟現象を説明するが爲めに當然價值理論の傍に別個の生産力の理論を考察するの必要を會得するに至る可き筈なりと做せり。(Das Nationale System der politischen Oekonomie, 7. Aufl., 1883, S. 123 f.)。而して歴史派の耆宿 Wilhelm Roscher が科學上に於ける畢生の目的は Smith 流の學說と歴史的探究の結果との間の和解を求むしめ、經濟生活の自然法を發見せんとするに在り。更らに Bruno Hildebrand に至りては Adam Smith 及び其の全學派を以て、彼れ等の先輩なるマルカンチリスト及びフレイホクラアトを等しく其の法則が總べての時代と國民とに對して絶對に確實性を有す可き國民經濟學說を建設せんとするの誤謬を犯せるものと觀たり。即ち彼れ曰く「彼れ等は凡ゆる國民經濟の法則が物財に對する人間の關係に基くを以て、時間と空間とを超越し、凡ゆる現象の變化によりて毫も動ざるゝとなしと做すの見解より出發し、斯くて又た人間が社會的存在として恒に文明の子にして、又た歴史の産物たるを、及び其の欲望、其の教育、其の人間及び物貨に對する關係は悉く同一の状態に在ることなく、地理的に相違し、又た絶えず歴史的に變化し、而して人類の全文化と共に進歩するものなることを全然忘却せり」云々。(Die Nationalökonomie der Gegenwart und Zukunft,

1848, S. 28-29.)。彼れは又た Smith を以て唯物主義の哲學者と稱して之れを難じ (Die gegenwärtige Aufgabe der Wissenschaft der Nationalökonomie—Jahrbuch für Nationalökonomie und Statistik, 1863, Heft I, S. 5 ff. u. 137 ff.)。Karl Kries も亦た Smith を以て全然倫理的唯物主義の基礎の上に立脚するものぞ做せり。(Die Politische O.konomie, a. a. O., S. 244.)。

八

Smith 以後の經濟學說—獨逸學者の謂ゆる Smithianismus は人類の精神的歸趣を念とすることなく、又た富は人世の更らに高遠なる目的に導くの手段たることを論せざるの非難を受けたり。洵に獨逸に於ては Smithianismus は非難の語と爲れり。而して此の名稱の下に調伏せられたる妖怪は丹念なる研究と博大なる知識と新信條に對する熱誠とによりて興へられたる凡ゆる武器を以て攻撃せられたり。而も斯くの如き攻撃は Smith 其の人よりも寧ろ其の後繼者に對するの觀なき能はず。英國に於ける獨逸歴史派の代表者たりし Thomas Edward Cliffe Leslie は極めて自由に Adam Smith を論評しながらも、彼れを以て Ricardo と全然別個の地位に置き「國富論」を以てよく歸納的研究方法の利益を證明せるものと主張し、正統派の流を汲む經濟學者は今や其の反對論者に答ふるに「Adam Smith の偉大」を以てす可しと論じたり。(Political Economy and Sociology, Fortnightly Review, February 1, 1879.)。而して歴史的研究の開路者 Simonde de Sismondi は夙に Smith と其の後繼者 Ricardo 及び Say 之間に重要な區別を設けつゝありしなり。彼れ曰く「Smith は凡ゆる事實を其れ自身の社會的環象に照して研究せんことを企圖せり」而して「實に彼れが不滅の著は人類史の

哲學的研究より生じたる成果なり」也。(Les Nouveaux Principes d'Economie Politique, ou de la Richesse dans ses rapports avec la Population, 1819, II. p. 56.)。

Joseph Shield Nicholson は Adam Smith を以て宛ち John Locke が近代哲學に對して有するに等しき關係を近代の經濟學に對して有するものと觀たり。Locke は演繹的及び歸納的推理を結合せり。彼れの後繼者は這個二重の方法を續行するの力なきか若しくは續行するを欲せずして、相對立する超絶哲學及び經驗的心理學派を發達せしめたり。而して是れ等兩者の一致は Kant に興へられたる大問題たりしなり。而して凡ゆる重要な哲學の體系が Locke を通じて溯求せられ得るに等しく、後世の諸經濟學派は Adam Smith を通じて探求せらるゝを得可し。社會主義經濟學は其の傳統を、勞働の所産は勞働の自然的報酬若しくは勞銀を構成す」と做せる Smith の宣言より引くものなり。米國の保護主義者 Henry Charles Carey は自己を以て Adam Smith の學說の唯一の眞解釋者なりと主張せり。(Nicholson, Introductory Essay, to Wealth of Nations, 1884, p. viii.)。洵に Adam Smith の「國富論」現れてより經濟思想上に於ける敵も味方も等しく彼れを以て其の出發點と做せるなり。斯くて總べての者は經濟學が彼れを以て始まるの事實を承認するに於て暗に一致しつゝあるなり。實に彼れ以前の經濟學は總べて皆な「國富論」の序文にして、彼れ以後の經濟學は之れを繼承し、若しくは之れを攻撃せるの相違あるも、悉く其の後篇たるの觀あるなり。

本篇は前號記載の分と共に「邦譯國富論題言」の一部を成すものなり。